

TEMPUS テンプレス

2005年(平成17年) **22**号



もくじ

願泉寺修理に向けて覆屋を建設

願泉寺の築地塀基礎

貝塚市歴史展示館オープン

貝塚市郷土資料展示室

企画展1「絵図に見る貝塚寺内のうつりかわり」

古文書講座

「願泉寺と貝塚寺内①一秀吉・家康の時代一」

季節をめぐって 夏 二色の浜と海水浴

要家文化財総合調査から

がんせん じしゅうり む おおい や けんせつ 願泉寺修理に向けて覆屋を建設

重要文化財願泉寺の修理がいよいよ本格的に始まりました。

工事はまず工事車両の進入路を確保するために、築地塀（ついじべい）を解体しました。



築地塀解体のようす



築地塀の基礎

解体に伴って、平成16年12月より平成17年4月まで築地塀に葺かれていた屋根瓦の調査や柱などの建築部材や墨書（ぼくしょ）の調査などを行いました。

築地塀の柱材には柱を組み立てるときの位置を順番に記した番付（ばんづけ）が残っていました。番付は3種類みつきり、少なくとも1～2回は築地塀の壁を解体して修理を行っていることがわかりました。



▲築地塀柱に残された番付と墨書▶





▲瓦の刻印
「瓦師／泉州貝塚 治良兵衛」



発掘調査のようす▶



覆屋建設のようす

さまざまな調査を実施する予定です。新たな事実も見つかるかもしれません。そのときはテンプスで報告します。

築地塀に葺かれた瓦からは、17世紀には現在地に屋根瓦を葺いた築地塀が築かれていた可能性が高くなりました。また、屋根は少なくとも3回は大きな修理を行い、そのなかで18世紀後半以降に最も大きな修理が行われ、このときに現在の築地塀の景観が整ったことがわかりました。

願泉寺は平成16年9月から平成17年6月まで覆屋（おおいや）建設の工事が行われました。ご覧になった方もいらっしゃると思いますが、本堂は工事用の覆屋ですっぽりと隠れてしまいました。工事中はクレーン車が動き、鉄骨の骨組みが高くそびえたち、日頃親しんでいたお寺の雰囲気はまったく無く、まるでビルの工事現場のようでした。

覆屋基礎の掘削に伴って埋蔵文化財の調査も実施し、江戸時代以降の整地層を確認しました。

これからは、いよいよ本堂の解体が始まります。貝塚市では解体中に数度の見学会を開催する予定です。見学会の日程はこのテンプスのほか、広報やホームページでもお知らせいたしますので、どうかご参加ください。

本堂解体に伴っては瓦や部材などのさま

願泉寺の築地塀基礎

願泉寺の修復工事に伴い、境内正面の築地塀の解体が行われました。

今回の解体工事によって、築地塀基礎の内部がどのように組まれているか（裏込め構造）を観察することができました。

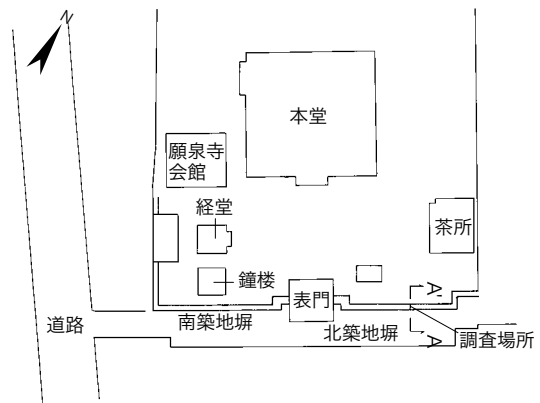
築地塀基礎の長さは約61m（南北合計）、幅は約1.3m、高さは0.6mです。使用されている石材は、長さが約1.5m、厚さは0.2m～0.3m、奥行きは0.25m～0.3mの花崗岩を3段に積み上げています。

両側に積み上げた石材の内部は、10cm前後の板状の割石と粘土でしっかりと充填されています。これが3層ないし4層構造となっており、石材の積み上げと裏込めを繰り返しながら、基礎が崩れないよう作られています。割石を用いる理由としては、水はけを良くし、土圧による基礎の膨張を防ぐ役目があります。土だけの裏込めでは、土が流出するおそれがあるからです。

解体を行った職人さんによると、築地塀基礎の石積みは非常に入念な工作をしているそうです。

基礎の解体により出土した瓦や陶磁器から現在見られる築地塀基礎は、18世紀後半以降に作られたものと考えられます。

* 「割石（わりいし）」とは、形を決めずに原石を割ったままのもの。（石材の加工に際して、打ち割った屑石など。）



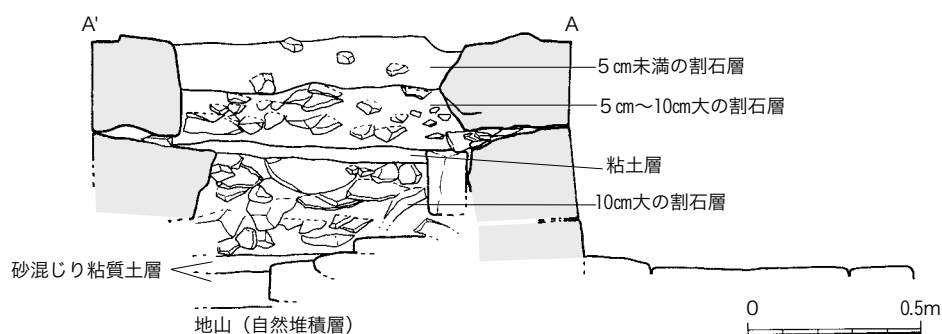
願泉寺境内略図



築地塀（解体前）



北築地塀基礎断面



北築地塀基礎断面図

貝塚市歴史展示館オープン



平成17年10月1日、ユニチカ株式会社貝塚工場跡地（貝塚市半田）に貝塚市歴史展示館がオープンします。



東京オリンピック金メダル獲得記念色紙
(貝塚市教育委員会蔵)

ユニチカ株式会社貝塚工場は、昭和10年（1935）に大日本紡績株式会社貝塚工場として阪和電鉄沿線（現在のJR阪和線）の貝塚町半田において操業を開始した紡績工場です。貝塚工場といえば、「東洋の魔女」と称され、回転レシーブを武器に世界制覇を成し遂げたニチボー貝塚女子バレーボールチームの誕生の地として有名です。ニチボー貝塚の選手を主力とした全日本女子バレーボールチームは、昭和35（1960）年秋に開催された第3回世界バレーボール選手権大会でソ連を破り世界制覇を成し遂げ、昭和39（1964）年に開催された東京オリンピックでも金メダルを獲得し人々の歓喜を呼びました。その後もチームは社会人リーグ等で活躍を続けました。産業構造の変化に伴いユニチカ貝塚工場は平成9（1997）年3月に操業を停止し、ニチボー貝塚の伝統を引き継いだ女子バレーボールチーム、ユニチカ・フェニックスも平成12（2000）年7月をもってその活動を停止しました。また、ニチボー貝塚が使用した旧体育館も平成16年に取り壊されましたが、現在貝塚工場跡地には平成2年に建設された新体育館がナショナルトレーニングセンターと名称を変え残されています。ナショナルトレーニングセンターでは、全日本女子バレーボールチームを中心とした強化合宿などに使用されたり、次世代を担う全国から選考された中学生たちが市内の中学校に通いながら専門的なトレーニングを受けたりしています。



ユニチカ株式会社貝塚工場の旧体育館での
地元高校バレー部の練習風景（平成6年撮影）

貝塚市歴史展示館は、昭和10（1925）年に建てられた大日本紡績株式会社貝塚工場の事務所の建物を展示館として改修したものです。館内には2室の展示室を設け、貝塚市の歴史（近世～近現代）およびニチボー貝塚女子バレーボールチームの歴史について展示を行います。貝塚市の歴史としては、近世の古文書や絵図等の複製品をもとにした貝塚寺内や岸和田藩領の村々の歴史、近現代の本市における行政区画の変遷、学校教育、紡績業等いくつかの個別テーマに沿った歴史を写真資料等をもとに展示する予定です。また、女子バレーボールチームの歴史としては、回転レシーブを生んだ旧体育館の床板や、チームの結成、躍進に関する賞状、カップ、写真等をもとに、大日本紡績株式会社貝塚工場の建設から東京オリンピックでの金メダル獲得までの歩みを中心に展示する予定です。オープンの際には、ぜひ一度お立ち寄りください。

企画展1「絵図に見る貝塚寺内のうつりかわり」

本展は平成17年5月28日(土)より平成17年7月3日(日)まで開催しました。本展では、貝塚寺内の近世都市としての変遷(17世紀半ば～明治初年)を願泉寺が所蔵する貝塚寺内絵図や願泉寺境内図、各町ごとの切図等を中心に展示紹介しました。貝塚寺内の絵図についてはこれまで多くの展示や文献で紹介されていますが、それらを一同に会した展示は今回が初めてです。

慶安の絵図に代表される貝塚寺内全体を描いた絵図8点のほか、貞享5(1688)年作成の「仏供田」(ぶっくでん)と呼ばれる田畑の土地交換を描いた絵図や享保14(1729)年作成の近木之町付近の町場の開発図等は、近世都市貝塚寺内の変遷を物語るものです。また、北之町・南之町の地割を詳細に描いた町切図や貝塚寺内境内の田畑部分を描いた絵図を展示したことで、一部ではありますが貝塚寺内の詳細な町割の復元が可能であることがわかりました。市民のみなさんはもちろん、市内外から多くの方々にご来室いただき、653名の観覧者数を数えました。



展示期間中には、第70回および第71回かいつか歴史文化セミナーを開催しました。6月12日(日)には大阪市立大学助教授の仁木宏氏による講演会「寺内町の平面と立体—絵図に見えない実態をさぐる—」を開催し、貝塚をはじめ各地に残る寺内町の絵図をもとに、近世に描かれた絵図による中世寺内町の復元に再検討が必要なこと、また絵図に描かれた表現(平面)と実際の地形(立体)との違いについてご講演いただきました。



また、6月19日(日)には貝塚寺内町歴史研究会会員の藤田実氏による講演会「寺内町と寺・神社・町」を開催し、貝塚をはじめ各地に残る寺内町の文献史料をもとに神社・商工業者・寺院・町(共同体)と寺内町の関係についてお話いただき、貝塚寺内の成立過程および感田神社や太鼓台の祭りの成立についてご講演いただきました。

平成17年度貝塚市郷土資料展示室企画展1 図録

『絵図に見る貝塚寺内のうつりかわり』刊行のお知らせ

上記企画展の展示図録を刊行しました。本書では、展示解説および展示品の全ての図版を掲載しています。

お求めは社会教育課または郷土資料展示室まで

※郵送でのご購入の場合、社会教育課あてに代金(郵便小為替)と送料180円(切手)をお送りください

A4判24頁 1部200円



古文書講座

◆「願泉寺と貝塚寺内①—秀吉・家康の時代—」

平成17年4月16日(土)から5回にわたり、「願泉寺と貝塚寺内①—秀吉と家康の時代—」と題して古文書講座を開催しました。

平成16年度より進めております、願泉寺の本堂等重要文化財建造物の半解体修理がはじまったことに関わって、願泉寺に残る古文書をテキストにしたもので、今年度は3期にわたって「願泉寺と貝塚寺内」を共通のテーマとして取り上げます。

今回の講座では、戦国時代から江戸時代へ移り変わる時期、ちょうど豊臣秀吉や徳川家康などが登場する史料を解説していきました。

その中では、秀吉が貝塚寺内に出した禁制(きんぜい)や家康が出した黒印状の写し、さらには、本願寺11世法主顕如がのちに願泉寺住職となるト半斎了珍(ぼくはんさいりょうちん)に宛てた書状などを取り上げました。予定していた秀吉の家来であった片桐且元(かたぎりかつもと)の書状は時間の関係で割愛しましたが、貝塚寺内というものがどのように形づくられていったのか、また当時の権力者たちにどのように認められていったのかということ、古文書を読み解くなかで参加者の皆さんとともに検討しました。

参加者の方々からは、身近な願泉寺の歴史的背景がわかって良かったという声や、次回の「願泉寺と貝塚寺内②—大名との交流と贈答—」(期間：8月20日～9月17日)を楽しみにしていますといった、ご意見・ご感想をいただきました。次回講座にはみなさま奮ってご参加ください。



季節をめぐる 夏

二色の浜と海水浴

貝塚市内の行楽地は様々あります。今回は夏にスポットを当て、海に行楽について紹介します。

かつて「茅渟海」(ちぬのうみ)と呼ばれ、大阪湾に面した貝塚市内の海岸に、二色の浜海水浴場があります。

その歴史は、昭和8(1933)年に当時の南海鉄道(現在の南海電気鉄道)が開設したことにはじまります。当時、観光開発に力を注いでいた南海鉄道は、翌昭和9年から、「二色浜駅」を臨時駅として毎年7月から9月までの間のみ電車を停車させました。昭和13年からは常設駅となり、現在に至っています。

高度経済成長の中、大阪湾の埋め立てが進み、二色の浜より北に位置した海水浴場が次々と姿を消していく中も、二色の浜は大阪府営の公園として存続しました。

名前である「二色」の由来は、白い砂と青い松の二つの色が織りなすコントラストから名付けられました。今もその面影を色濃くのこしています。



要家文化財総合調査から

教育委員会では、平成13年度より5か年の計画で、貝塚市畠中に所在する要家にのこされた各種文化財の調査を行ってきました。これまで古文書、植生、発掘、建造物の調査を実施しました。

ここでは、それらのうち、古文書調査について紹介します。

◆古文書調査

要家の土蔵にのこされていた古文書は、平成16年度終了時の整理完了分で、38,533点を数えています。

江戸時代は、岸和田藩領内の最も有力な庄屋であった「七人庄屋」の一人であり、畠中村と神前村2か村の庄屋を勤める家でした。

そのため、藩の村方支配の一員として、さまざまな公用にたずさわり、領民のもめごとや村どうしの争いを仲裁する立場にありました。そのことを物語る史料が数多く確認されています。

確認されている古文書類の時期については、応永21（1414）年の土地売券が最も古いものですが、全体的には16世紀末～昭和の初め頃までのものが中心です。

また、内容については、当時の畠中村・神前村の年貢に関する記録のほか、人の移動に関する記録、牛の売買をめぐる争論の記録、農作物の作付けに関する記録、享保6（1721）年～天保12（1841）年の120年間のうち欠落などがありますが、約60年分の日記などが確認されています。

それらのうち注目される史料として、件（くだん）井と呼ばれた用水に関する記録を取り上げます。

件井は近木庄地域のうち畠中・神前・加治・脇浜を灌漑（かんがい）する用水です。その水源は、近木川上流で近木川と稲谷（きびたに）川が合流する水間寺の周辺にあります。ここから近木川の水を取り入れ、まず永寿（えいじゅ）池に水をためていきます。この水をさらに橋本にある河池へ流し、近木川をせきとめる件井堰（これより件井）で近木川の対岸に水を移し、畠中にある今池・菰（こも）池に水をためる構造になっています（右上絵図参照）。この件井の維持管理については、それぞれが共同で負担しており、「件番」と呼び、持ち回りで当番をしていたことがわかります。件井の史料についても持ち回りであったと考えられますが水利組合の成立により、それまでの史料は要家に保管されるようになったのでしょう。



編集後記

昨年は台風が多く上陸した年でした。今年には空梅雨から一転、大雨が降りつづいたり、天候が不安定です。梅雨が明ければいよいよ夏本番です。

市内には海（二色の浜）、山（和泉葛城山）それぞれに歴史があり、寺社、天然記念物などさまざまな文化財があります。夏休み、暑い中ですが身近な文化財を探検してみたいかがですか。

かいつか文化財だよりテンプス22号



平成17年7月31日発行

貝塚市教育委員会

〒597-8585 貝塚市畠中1丁目17-1

Tel (0724) 33-7126 Fax (0724) 33-7107

Email: shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

印刷 (株)和歌山印刷所

※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。

年4回発行：各1,000部

印刷単価：67.20円